物　語

「與兵衛さんとゴンゲ（権現）様」（1）

轟木下　鈴木玲子

昔々、南部の轟木というところに、與兵衛さんという長者様が住んでおり、與兵衛さんから借りた田や畑を耕す小作人やその家族たちが大勢暮らしておりました。

その轟木村の小高い丘にはお社があり、昔から村を災害から守っていて下さるというゴンゲ（権現）様が奉られておりました。

ゴンゲ様に守られた村人たちは働き者で、朝から晩まで仕事に精を出し、広々とした田や畑には作物がよく実るという豊かな村でありました。與兵衛さんも村人たちも困ったことがあると『ゴンゲ様に』、めでたいことがあっても『ゴンゲ様に』と、いつもお参りを欠かすことなく、大切にしておりました。

そんなある晩のことでした。

「今夜は風が強いから、戸締まりや火の用心をしっかり頼みますよ。」と與兵衛さんに言われた使用人たちは、屋敷中のあちこちを見て回り、火の始末もいつもより念入りにして床につきました。

風がピューピューと吹きすさぶ中、しだいに夜もふけて、みんながシーンと寝静まったころのことです。不思議なことがおこりました。しっかり始末をしたはずの消し壺から『ポッ！』と火が飛び出したのです。火は床に落ち、ブスブスと静かに燃え広がっていきました。

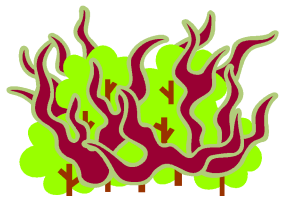
昼の疲れもあってぐっすり寝込んでいる使用人たちは、台所で大変なことが起きているのに少しも気がつきません。音もなく這うように火と煙が広がっていく、その時のことです。

どこからともなく「ピーッ、ピーッ、ピーッ、ピーッ」という物悲しい音が、かすかに聞こえて来ます。胸騒ぎを覚えた與兵衛さんは、寝間着の襟をかき寄せながら障子の戸を開け、廊下に出てみました。すると何と、広い廊下一面、煙が立ち込め、あたりは何も見えないではありませんか。

「か、か、火事だー。」　與兵衛さんは腰をぬかさんばかりに驚きました。

「大変だー！、火事だー。火事だぞー！、みんな起きろー！」

與兵衛さんのただならぬ声に、寝ぼけまなこで起き出してきた使用人たちは慌てふためきました。あたり一面、煙と火の海です。　（続きは次号で）



轟木小學初代校長

藤澤茂助（1）

小川真氏発行「続はちのへ今昔」他より

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらえて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」

かつて**会津藩**あり、今は滅びて跡形もなし、されど会津侍魂、絶えることなく今に伝う。

八戸市の**市川**に**轟木小学校**あり、初代校長を、**藤澤茂助**という。会津藩士、北遷、**斗南藩**に命運を賭し、北の大地に足を踏み込む。**広沢安任**、**佐川官兵衛**らと共に天保二年の生まれ。時間軸少しく傾けば、藤澤一族は八戸の地を踏むこともなし。過酷、非情な時の流れ。**芭蕉（奥の細道、**冒頭「序」）のみならず、藤澤一族も人生の旅、果ては青森県で**地の塩**となる。

※「地の塩」とは、筆者は「栄達を望まず我を捨て、その地で人を育てる役割を担った優れし者」の意味で使う。

〈**年譜**〉　・天保二年生れ　・嘉永六年、**ペリー**来航時には品川沖砲台詰　・高島流砲術家　・江川塾の塾頭　・**会津藩校「日新館」**の教師補　・文久元年、会津藩砲術指南役　・京都御守護職師範大砲方頭取　・慶応二年、丹波福知山砲術師範役　・明治元年の**会津戦争**では、大砲隊長として**薩長**と戦う　・明治三年、会津藩士一万七千余人移住、斗南藩藩庁は五戸から田名部へ　刀を鍬に代えて開墾、困苦を克服、生き抜く　・明治四年の**廃藩置県**で斗南藩は消滅

＊要約　木村隆一

（続きは次号で　→　轟木小學を中心に）